

氏名(本籍)	いわいひろみ(奈良県) 岩井宏實				
学位の種類	文学博士				
学位記番号	博乙第462号				
学位授与年月日	昭和63年7月31日				
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当				
審査研究科	歴史・人類学研究科				
学位論文題目	地域社会の民俗学的研究				
主査	筑波大学教授	文学博士	宮田	登	
副査	筑波大学教授	文学博士	北見	俊夫	
副査	筑波大学助教授		高桑	守	
副査	筑波大学助教授	文学博士	熊倉	功夫	
副査	筑波大学教授	文学博士	横山	十四男	

論文の要旨

本論文は、民俗学研究の基本にある地域社会の研究における理論と実際を統一的に把握することを意図した内容である。その骨子は、歴史的考察と民俗事象の集積に加えて、地域の空間構成とそれに関わる人々の生活を有機的に連関させることにより、地域の個性、民俗環境の実態を浮彫りさせることであり、空間構成と伝承される個々の事象が一体化されて分析、説明されている点に特色が示される。全体は序章、第1章から第8章、さらに付章と終章からなり、本文580頁の大著としてまとめられている（法政大学出版局、昭和62年12月25日日刊）。

序章「研究の指標」では、民俗学における地域の民俗文化の調査・研究の視点を論述している。地域が伝承の母胎で歴史的現実を示すことから、文献・遺物・伝承資料の形態の相違はあっても、共同体的な生活集団に即応する生活文化の究明のためには、伝承資料を軸として、あらゆる形態の資料が有効であることを説いている。

第1章「共同体の民俗的構造」は、序章の課題の設定にもとづき、①休日の問題、②中世豪族の家筋の問題、③村落生活における「公」の問題、④町における共同体の問題、⑤村と町の交渉に関する問題をそれぞれ取り上げ、多角的に検討する。①については、地域社会における時間認識を自然的時間、生産的時間、社会的時間などに分類して、その特性・構造・変化などを明らかにしている。②では、地域社会における中世豪族と称される家が、近世にどのように引き継がれ、どういう役割を果たしたかを具体的に検証し、中世～近世は断絶せず、「家永続」の営みが認められるとしている。③では、地域社会における「公」という生活倫理を成立させている要素が、村落における一

軒前の家によって構成されることを明らかにしている。④では、町における共同体の機能が、町内に拠点をもつ会所であることの実態を、奈良や京都の事例により論証している。⑤では、村方による町方の下肥汲慣行の考察を通じて、村と町の連続性を論じ、地域社会としての「近郊農村」の範囲を規定しようとしている。

第2章「結衆と芸能」は、①風流踊の芸能、②お蔭参りとお蔭踊、③開帳と芸能を、それぞれ地域社会との結びつきから論じている。①では、大和地方に分布する風流踊の芸能の発生と伝播が、郷村を基盤にして行われている実態を明らかにしている。とりわけ芸能の伝承基盤の究明に意を注いだことに特色がある。②では、お蔭踊の芸能が、絵馬資料などからみると、伝統的な風流踊の再現であり、それを支える郷村単位の村落結合の実態が把握できる点を指摘している。③では、江戸・大阪における開帳とそれに伴う芸能の関連性を究明しようとしている。とくに川浚え・砂持ちの習俗が風流踊を惹起させた過程をみることにより、結衆の原理が浮彫りできるとしている。

第3章「民俗信仰の基調」は、地域社会における信仰生活の諸相を、①ダケ・モリの信仰、②祭祀、③宮座、④神饌の4つの問題を通して究明している。①は大和地方のダケ・モリと称する山と森が祖霊信仰と結びついていることを説明している。②は、祭祀の中心が厳粛な神事の部分にあるという民俗学の立場を主張している。③は、宮座の変遷について、村座から株座へ、株座から擬制株座へ、擬制株座から村座へという段階をとるといって説を提唱している。④は、祭祀の中心である神事の重点が神饌の献供と神人共食で表現されることを、地域社会の食生活の中から抽出している。本章では祭祀や宮座の本質が、地域社会の日常生活との関わりの中から説明できることが明らかにされている。

第4章「山村の生業と技術」は、地域社会における、とくに山村の生業に焦点を合わせて論述している。①山村の生業については、十津川郷の植林・造林・材木・運材の過程を地域社会における山村の生活技術の変遷としてとらえている。②十津川郷の筏役については、近世十津川村における筏役の実態を調査し、古くは無主であった十津川村が近世封建制の中に組み込まれる過程をとらえている。③吉野川筋の筏流しは、筏の組編みと流送技術を詳細に調査した結果をまとめている。このような地域社会が創出した生活技術は、全国各地の筏技術と比較研究が可能であるという見通しが述べられている。④賀名生川筋材木川下げについては、材木の流送にさまざまな方法があり、そこから起こる諸問題を説明している。①～④は、いずれも地域社会の社会的結合とその対立が、生活技術のあり方に反映する1つの要因になることを明らかにして、地域社会の内蔵する機能面を究明した。

第5章「村の個性と民俗環境」は、これまでの第1～第4章の論述を収斂させて、民俗学研究の基本である地域研究の具体例をとり上げている。その骨子は、異なる地域に同じ民俗事象が伝承されていたとしても、その伝承基盤・条件が異なる場合があり、一方伝承基盤・条件が同じでも異なった民俗事象が伝承される場合もある、という前提に立った時、伝承基盤と伝承事象を構造的に把握する必要性があり、そのためには地域社会が本来備えている個性すなわち民俗環境が明らかにされねばならないとする。民俗環境とは民俗の空間認識であり、同時に生活の場に形成された時間

認識が統合されてはじめて把握されるべきものだという。別言すれば、村や町の個性が形成される中核としての民俗環境論の提示ということである。民俗環境と村の個性を比較の基準とすることにより、全国的視野の中から、一つの法則性を発見しようとしている。なお具体例として、吉野山・天川郷・三名郷・川上郷・北上郷・野迫川・十津川郷などの事例が選定されている。また「吉野民俗語彙」を収録して民俗研究における民俗語彙集積の作業の位置づけを行っている。

付章「現代生活と伝承文化」は、変容する現代社会の中で、民俗の変容と再生について論じている。とりわけ都市の生活様式が、都市なりの伝統的な習俗を示すと同時に新しい民俗の再生を促していることを指摘している。

終章「総括と展望」では、今後の課題として、地域の空間構成と人々の日常生活を統一的に把握することと同時に、生活様式の基盤に潜在する時間意識を構造的にとらえ、さらに他地域のそれとの比較を積み重ねる方向性が提示されている。

審 査 の 要 旨

本論文は、日本民俗学における地域研究の理論的展開にいくつかの新知見を提示した内容として高く評価できるものである。その第一は、従来の民俗を伝承させる母胎としての地域社会のとらえ方が、たんなるムラではなく、複数で連合している郷村的結合、あるいは村と町の連続する生活単位、さらに都市空間といったように広狭自在の空間に設定していることである。そうした視点にもとづき第二に、「民俗環境」あるいは「村・町の個性」といった指標を地域の比較基準として設定したことである。とくに本論文第5章は、主として近畿地方を具体例にその具体的検証を試みた点が注目される。第三に、地域社会における時間と空間とを生活次元で統一的に把握するために資料として、伝承・文献・遺物の有機的関連性を認め、とりわけ絵馬・絵巻物などの図像類を有効に利用できる可能性を証明したことである。

以上のような積極的評価に対して、今後より一層検討しておくべき問題点も若干認められる。一つは、著者が用いた「共同体」の概念については、やや明確さを欠いており、いきおい「地域社会」に対する分析のあいまいさが指摘されることになった点である。二つには分析事例の大部分が、近畿地方に偏重する傾向があり、またフィールドとしての農・漁村の具体例に乏しかったことが、全国的視野からの概念設定にまだ十分達し得なかったのではないかという点である。三つには、民俗資料としての絵馬・絵巻物の積極的利用はよいとしても、なおそれらの資料論となると作者や年代、作為性などに検討の余地があり、解決されぬ部分が残されている点などである。

以上本論文には、今後解決されるべき可能性が残されているが、著者のこれまでの永年の研究成果の上立って、豊富な絵馬や民具の知見を加え、さらに大きな前進を企てたことは明らかである。とりわけ地域社会の民俗環境論の諸成果は学界に寄与することが大きいものと評価される。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格があるものと認める。